

大津町議会 文教厚生常任委員会行政調査報告

氏名 佐藤 真二

視察研修名：大津町議会文教厚生常任委員会行政視察

研 修 先：①大阪府 泉大津市

②大阪府 泉南市

期 日：令和7年10月30日（木）～31日（金）

研修テーマ：①「市立図書館 シープラ」の取り組みについて

②「小規模特認校 市立東小学校」の取り組みについて

研修報告 意見・感想

訪問先2市との財政指標の比較 （決算カードベース）

単位：千円、人、%

		大津町	泉南市	泉大津市
住基人口	R7.1	36,334	58,145	72,762
面積	R6	99.1	48.98	14.33
人口密度		366.6	1227.1	5193
歳入	R5	19,690,317	28,331,143	39,371,973
	R6	21,530,440	28,785,989	38,017,923
歳出	R5	18,171,113	28,271,544	39,134,586
	R6	19,672,017	28,455,936	37,712,544
教育費構成比	R6	12.9	9.5	15.7
実質収支	R5	459,905	17,618	220,812
	R6	1,456,373	310,369	225,746
財調現在高	R6	2,745,364	1921448	4,754,206
地方債現在高	R6	16,606,272	2,242,980	27,658,312
経常収支比率	R6	90.5	98.2	100.8
基準財政収入額	R6	5,857,600	8,010,021	10,466,742
基準財政需要額	R6	7,871,024	12,227,526	15,556,106
財政力指数	R6	0.73	0.67	0.687
実質収支比率	R6	15.4	2.15	1.2
経常一般財源比率	R6	102.1	102.6	102.4
公債費負担率	R6	12.7	13.9	10.8
実質公債比率	R6	15.4	8.1	7.4

① 「市立図書館 シープラ」の取り組みについて

〔泉大津市の概要〕（AI まとめより）

大阪府の南部に位置し、大阪湾に面した港湾都市であり、江戸時代からの繊維産業を背景に、特に毛布の製造が地場産業として発展し国内生産量の約90%を占める「日本一の毛布のまち」で、ニット製品や毛織物も盛ん。

市内はほぼ平坦でコンパクト。南海本線の急行が停車し、大阪市のベッドタウン。鉄道駅を中心に再開発が進み、商業施設や医療施設が充実し、子育て支援にも力を入れ、子育てしやすいまちとしても評価されている。

〔市立図書館シープラの概要〕（AI まとめより）

「シープラ」は、2021年9月に南海電鉄泉大津駅前の商業施設「アルザタウン泉大津」4階にオープン。愛称は、市のマスコットである羊（Sheep）と図書館（library）を組み合わせ、「ぷらりと気軽に立ち寄れる場所」という意味も込められている。

「すべての市民が新しい価値を創造する図書館」をコンセプトに掲げ、これを実現するため、3つの「活動の柱」と「サービスの柱」を軸に運営している。

3つの「活動の柱」：学び、協働、創造

3つの「サービスの柱」：発信（ビジネス支援の充実）、交流（多種多様なイベントの実施）、連携（学校・企業との連携強化）

施設は、延床面積約3,500㎡のワンフロアに約15万冊を開架。

駅直結の利便性を活かし、ビジネス支援の充実、多世代が利用できる約500席の座席（電源・Wi-Fi完備）、学校図書館とのシステム統合など、従来の「静寂の図書館」から「社会を包み込む図書館」へと進化し、「まちの知的・交流拠点」としての機能強化を図っている。

〔行政視察の概要〕

日時： R7.10.30 13:30～15:00

対応者： 河瀬 裕子館長

熊本県 旧鹿本町出身

仕事 熊本・学校図書館（2000～2003年）

熊本・旧鹿本町図書館（2003～2008年）

熊本・益城町図書館（2008～2011年）

熊本・くまもと森都心プラザ図書館（2011～2020年）

泉大津市・シープラ（現在）

○施設の見学



・はじまりウォール



旧図書館の創設の由来、創設者近藤朴斎氏の寄贈した和漢書を展示

展示は、学芸員に依頼。展示しにくいものなので、デジタルアーカイブ化を進めている。



・おりあみゆー

町の歴史、織物産業の歴史について展示（歴史博物館は保管のみにした）
児童書コーナーに隣接させ、「今は何かわからなくても、（ふるさとに関係する）何かがあった」との記憶が残ればよいと期待。



・ショップ c o o n

地場産業の繊維製品の展示販売、コーヒー等の販売（ビジネススタイルは後述）

・ここリソース

泉大津の産業について、企業の事業・ビジネスリーダーの推薦書などを展示
図書館から個々の企業に依頼する形で実施している。



・ネイチャーブレイク

サボテンなどの鉢植えを無償で館内に貸し出す。ネイチャーブレイク用。



- のぼるん、つくるん、たべるん
 のぼるん：靴を脱ぐ小上がりスペース。
 絵本が多く、午前中は、読み聞かせ
 などにも利用。声は気にならない。
 夕方は中学生などがゴロゴロしてゲーム
 などしているが、それも OK.



- カームダウンスペース
 益城町でも同じものを設置。大型
 絵本の書架としても有効。



- 書架案内ロボ
 市内企業のH C I (株)と連携。図書検索システム
 (O P A C) の出力レシートのバーコードを外付け
 センサで読み取って該当の書架に案内。



- オープンセミナースペース
 ビジネス支援などのセミナーを開催。
 マイク・スピーカーも使うが、音への苦情
 はない。むしろ、耳に入った言葉が気にな
 って聴取にくる場合もある。



・会議室、多目的室

会議室は有料だが安価（1時間400円、ショップ経営者による委託管理で、図書館は現金を扱わない）

ティーンズ会議室は、生徒手帳など提示で75%オフ。勉強、おしゃべり、ゲームなどにも利用。



・スタディールーム

中高生の勉強用スペース。

こことラーニングルームだけは、「おしずかに」の表示をしている。



・リフレッシュコーナー

飲食可能なスペースだが、当初は遠慮しながら使われていたが、模様替えをして、緑を配置、ハイレゾで自然音を流すなどの工夫で利用者増。



・館内全般

スタディールームを除き、館内には「○○禁止」などの表示はない。

館内の案内パネルには、注意事項ではなく、「一緒に快適な空間を作りましょう」という呼びかけがある。

○会議室での説明

(事前質問への回答)

①図書館が子どもの居場所になるためのポイント

- ・以前の図書館は、中学校2校の近くという立地だったが、「子どもはうるさいから来るな。」と言われていた。
- ・現在は、運営側の許容範囲で、(音を出しても)「OKにする方法を大人が考える」
- ・図書館のイメージ「本を読まなきゃ」「静かにしなきゃ」ではない。なんでも(ex:ゲーム)などをするための来館もOK。ダメダメと言わないこと。
- ・過去の大惨事といっても、高校生が椅子に冷やし中華をこぼした、という程度で掃除の方が片付けて、何も問題はなかった。

②「〇〇をしてはいけない」を言わない図書館、トラブルなどはないか。

- ・開館1カ月くらいは、前の図書館の利用者から「うるさい、これが図書館か」とクレームもあった。2〜3カ月で変わった。「子どもはうるさいが、勉強している姿を見られてよかった。」との声もあった。

警察や学校とも連携している。

学校の先生は、館内でも生徒を指導しようとするが、それに対しては「館内の責任は図書館側にあり、指導する必要はない。」と説明。生徒からは「自分たちを信頼してもらってうれしい。」という反応もあった。

- ・市長からは、図書館の運営が変わって、「市内に寛容さが広がったように感じる」との感想もある。

③イベントの企画等による来館者増、その他の要因。子どもの読書習慣。

- ・「本を読む、借りる」ことは必須ではない。書架にならんだ背表紙を見るだけでも知的行為。散歩のようにただ来ただけでよいと考えている。
- ・市外の利用者も制限していない。協定は近隣と結んでいるが、違いは予約・リクエストの可否。
- ・南海電鉄の定期券利用者からは「家と学校の間に在ってよかった」との声もある。
- ・カウンターのウェルカム感がすごい、とも言われる。いらっしやいませ、こんにちはの声掛けと、顔を上げておくことに配慮している。
- ・子どもの読書量について、以前は子どもの読書活動推進計画は単独で策定されておらず、生涯学習計画の一部だった。
- ・計画策定では、生涯学習課のほか、福祉部門などの関係課長もあつめた。計画の評価も同様で、1年間の結果を中学生が評価する意見を聞く。
「この一年間、大人はこうしてきた。」中学生の意見を聞き「来年はこうすると約束」するというサイクル。

④質的評価の取り組み

- ・貸し出し冊数や来館者数ではなく、利用者にとっての利用価値で評価。

⑤ビジネス支援の取り組み

- ・ここリソースの展示など、企業との連携は、必ず図書館側から依頼する。こうした展示は、市民が市内の企業の活動を知ることができる機会となり、シビックプライドの醸成にもつながっていく。

- ・企業の利用により、開発や起業があれば、稼げる図書館ということにもなる。

ビジネス支援には、行政支援、議会図書室支援などの面もある。行政も、先進事例の調査などの必要なレファレンス作業は図書館に依頼することがある。

議会図書室にも本を持ち込み、内容を議員にメールで知らせている。レファレンスの依頼も増えてきている。行政の答える能力にも貢献している。

- ・職員の気持ちの持っていきかたが重要で、スタッフが考え方を共有する必要。

会計年度任用職員は26名だが司書は6人。他は他の業種を経験した人たちで、これがビジネス支援には必要。

(質疑応答)

○ビジネスライブラリアンとは

ビジネス図書館支援推進協議会が育成している資格取得は東京で3日間の研修が必要だが、予算がつかない。自費で受講する人もいるが、資格手当のようなものはない。

○指定管理にしなかった理由

旧図書館は、市の再任用職員が館長で他に何人かの職員。窓口は業務委託だった。必要なことは市政と図書館の相互の理解と連携だが、指定管理にすると仕様書に縛られることもあり、市政から離れてしまう。

○会計年度職員の年限

5年で、今年がそれにあたるが、希望すれば継続できるようにする。昇給も可。正職員に近い収入の人もある。

○計画策定での子どもの意見の反映

ワークショップを開催。大人の意見は、いわゆる昔ながらの図書館像が前提。

子どもの意見も、ありそうな型にはまった意見だったが、途中のお菓子タイムで休憩していた中で、本音の意見が続出した。会議のフォーマルな場では意見が出にくい、休憩中に本音の意見が出てきているのを委員が聞き取った。

「なぜ、図書館を使わないのか、図書館に何があったらいいか」などを聞いた。意見として「おしゃべりOK」「寝たい」「友達と一緒に本を読みたい」などの意見があり、また漢字が書けない中学生がいたりした。

意見を反映して、枕の貸し出し（「リチャージ中」の札も表示）や、大きな本や、易しい言葉の本などを充実させている。

○学校図書館の地域開放

小学校8、中学校3があるが、地域開放は、現在4校で、学校の改築に合わせて年1校ずつ拡大していく。学校施設をうまく区分してセキュリティの分離のうえ実施。

学校支援では、学校に負担をかけないように、シンプルな仕組み（紙一枚に日時、単元など最低限を記入し fax で送る）で実施。朝の読書のサポートや、学期ごとに千冊の本を持ち込んだりしている。
OPAC も統一している。

○子どもの読書活動推進計画にある、「アウトプット」の例

調べ学習コンクールを実施。全国版があるが、地域コンクールを開催。夏休みのイベント 30 本の 中で、その場で質問を出して、調べて画用紙 1 枚にまとめる。最初は 20 数名の参加だったが、今年は 90 数名の参加があった。

○ショップでの販売のシステム

市と商工会議所でプロモーション会社を設立し運営。コーヒーの販売もしている。

図書館の会議室の貸し出しなども委託。場所代だけだと営業が厳しく、営業が過剰になることを懸念。

カフェの設置も考えたが、同ビルの 2 階のカフェと競合するので、コーヒー販売にとどめた。

○セミナー講師の報酬は

企業協力による無償のものもあれば、館長の科研費を使って大学の先生などの講習もある。市で予算化しているものもあり。

○ユニフォームの被服費は

被服費で予算化。一部は自前のものもある。遠目にもスタッフであることがわかるスカーフを採用している。

ビジネス支援をするうえでは、相応しい服装がある。エプロン姿ではだめ。

※所感

子どもの居場所やビジネス支援など（図書館の 8 つの機能に位置づけ）、従来型の図書館ではなく、新しい図書館像を目指している。説明の中では、「中学生」に関するエピソードが多く、そこを意識しているようにも感じられた。

様々なアイデアが実現していて、スタッフの熱意と、市の理解に裏付けられているものとみられる。しかし、市の理解の中にも、図書館の経費についてはどうか以下に検証してみる。

泉大津市は、人口・財政ともに大津町のほぼ 2 倍で、財政指標においても特に厳しい数値は出ていない。

そうした中、図書館の経費（経常的経費のみが計上されている）を歳出総額における構成比で 比較すると大津町を 0.07% 上回っているように見える。しかし、シープラの賃借フロアの経費を除き試算してみると、むしろ泉大津市が 0.04% 下回っており、大津町との比較において突出しているものではない。住民一人当たりの支出も少ない。さらに図書の購入費は倍となっている。

図書館運営経費の比較 (R6一般会計決算書：繰越明許費を含む)	決算額		構成比(歳出総額＝100%)		住民一人あたり	
	泉大津市	大津町	泉大津	大津	泉大津	大津
住基人口 R7.1.1 (人)	72,762	36,334				
一般会計歳出総額	40,578,732	20,664,223	100%	100%	557.69	568.73
教育費	7,160,574	2,632,801	17.65%	12.74%	98.41	72.46
社会教育費	570,420	247,400	1.41%	1.20%	7.84	6.81
図書館費	202,706	88,454	0.50%	0.43%	2.79	2.43
図書館運営事業	90,130					
図書館維持管理業務	78,384					
床借上料	45,457					
図書整備事業	38,911	9,816	0.10%	0.05%	0.53	0.27
ブックスタート事業	281					
賃借料を除く試算：図書館費	157,255	88,454	0.39%	0.43%	2.16	2.43

大津町の図書館にビジネス支援のニーズがあるか、またあったとして対応できるかは新都心プラザ図書館との機能的すみ分けという点で確認が必要だが、地域企業との連携である「ここリソース」の取り組みなどは模倣できるのではないかな。

町の産業構造に変化が生じている現在、例えば半導体関連企業の展示などは町民にとっても関心が高く、生涯学習のテーマとしても求められているものではないかな。

シープラの取り組み、河瀬館長の熱意と見識、人柄には非常に感銘を受けた。

また、生涯学習の意義と役割、あり方について改めて考えさせていただき、感謝したい。

② 「小規模特認校 市立東小学校」の取り組みについて

〔泉南市の概要〕（AI まとめより）

大阪府の南西部に位置し、大阪湾に面した臨空都市。沖合の埋立地に関西国際空港があり、その約3分の1が含まれていて、空港関連産業が活性化している。

古代から栄えた歴史を持ち、市内には熊野街道の信達宿や、野田藤の名所もある。温暖な気候を活かした農業が盛んで、「水なす」や「さといも」などが特産品。

都心部から約1時間圏内と交通アクセスも良く、豊かな自然と空港による国際的な機能を併せ持つ地域。

〔市立東小学校の小規模特認校制度の概要〕（AI まとめより）

小規模特認校制度は、地元児童数の減少に歯止めをかけ、学校規模を維持するため、平成18年度に創設された。山間部に位置する東小学校の豊かな自然環境と少人数教育という特色を活かしている。

制度導入後、他校区からの特認対象児童は徐々に増加し、一時的に児童数の減少に歯止めがかかったが、地元児童の減少傾向は止まらず、平成23年度には特認児童数が地元児童数を逆転し、その傾向は継続している。

令和7年度の全校児童数は78名（募集要項では各学年定員20名）。小規模校の特徴を活かした体験学習や地域交流が活発に行われている。

通学は保護者の責任と負担で行うことが条件だが、さわやかバス（コミュニティバス）の利用や保護者による送迎が可能。現在、バス通学の費用には市から半額の補助がある。

特認児童が増加する中で、保護者・地域による協力体制が学校運営の大きな支えとなっている。一方で、放課後学習の実施方法など、通学の特性に合わせた教育活動の工夫が続けられています。

[行政視察の概要]

日時： R7.10.31 10:00～11:30

対応者： 東小 河野 敬重 校長

教育委員会教育部 部長

〃 指導課 参事 参与

泉南市議会 議長

〃 事務局 局長 司会の方（名刺交換漏れ）

○議長挨拶（市の紹介、小規模特認校の開始時の説明）

- ・東小は母校。地元。
- ・熊本地震ではボランティア、荒尾を拠点に活動。
- ・市には、臨空ロングパークや、昭和体験学習ができる、わいわい村などがある。
- ・梅の名産地であり、唯一品種の「金熊寺梅」を保存。
- ・泉南アナゴを近大と共同で養殖。
- ・自身は東小のPTA副会長をしており、教育問題審議会のメンバーでもあった。小規模特認校化の提唱者であり、保護者としても関わった。
- ・市は市街化調整区域が大半で、校区に住宅が建つことは期待できない。
- ・小学校を「ランドマークとして」残したいとの強い意志
- ・特認校のあるべき姿や、小規模校のデメリットの克服を模索している。

○校長の説明（パワポスライド資料あり）

- ・特認校の実施要項で定員を各学年20名としている。今年も説明会・見学会などに9家族が参加し、きょうだい関係もあるので来年も10人以上の制度利用が見込まれている。
- ・中学校に上がったときに戸惑わないような力（ex:「わからない」を言える）をつけるようにしている。
- ・学力面では、NTRの結果に基づき、個々の能力を把握し、児童と面談して目標を定めている。
- ・主体性を重んじて、先生が先に手を回しすぎないように。（総合畑では、先生が下準備していたものを児童にさせるなど）
- ・少人数の特性を生かし、教え合いなどを取り入れている。

- ・和歌山大学、桃山学院、など多くの大学の先生の協力を得ている。
 - ・国際化（英語）の取り組みでは、JETプログラムのALTを各学年に1人つけている。
 - ・畑総合（総合的学習の時間で、畑で野菜づくり。3～6年協同）。以前は、先生が畝立てや土づくりなどをしていたが、今は児童にさせている。土は企業から貰える。
- 鳥獣被害があったとき、児童が自主的に案山子づくりや、反射テープ張りなどを考えて実施。野菜嫌いだった子も、この畑で作った野菜だけは食べるようになったとのこと。
- ・わくわく学習での川遊びには、学芸員を招き生き物の説明などしてもらっている。
 - ・タケノコづくりは、近隣の家で児童がアク抜きまで行う。
 - ・5年生は田植えと刈り取りを体験。
 - ・隣の小学校との交流もある。
- （特認校としては）
- ・バスの時間に合わせた時程を組んでいる。
 - ・（議長）バスは、市街地からだけでなく、山側からくる子もいる。バス停まで4キロあたりする家もある。

〔事前質問への回答〕

○通級など、支援学級との関係

支援学級は4名の定員、特段の取り組みはしないが、小規模なので自然に交流できている

○授業編成の工夫

カリキュラムが変わらない。小回りが利くので、多様な活動に取り組みやすい。縦割りも自然にできて、掃除、運動会、遠足などを実施。畑総合も3～6年協同。

○バス利用

バス利用は半数弱。通学時運行を導入し、ルート・時間を学校と関係課などで調整する。

山から下りてくるルートでは、バス停まで4キロあるようなところもある。高齢者に席を譲ったり、低学年を座らせて、高学年は立ったり、など社会性も身につく。

○芝生グラウンド

（議長が学校運営協議会委員の時導入）

橋本徹知事の時、すべての市町村で1校は芝生グラウンドにする取り組み。

東小ならできるよねとのことで、当時ゴルフ場勤めだった議長が関与。

床を作るところから準備、校区にある園芸会社も参加、ゴルフ場のグリーンキーパーの指導があり土木事務所も見に来ている

芝生化で足への負担が少なく、視覚的にも効果がある。

現在もゴルフ場のグリーンキーパーが指導してくれている。

[現地での質問]

○特認校を選ぶ理由

自然環境がよい、教育活動の特色、大きなコミュニティに不適応など様々ある。

○P T A活動は

選択時の面談の中で、協力していただくことを確認している。保護者は協力的で、夏休みの夕涼み会を開き、縁日なども開催。

運動会も2種目参加してもらう。子ども会はない。

○サン愛学習会（無料塾）は

サン愛塾は以前、教員と保護者でやっていたが、保護者の修行、教職員の働き方改革で継続ができなくなった。現在は月1回、近隣の寺の住職の話などを聞くなどの活動をしている。

学童保育はないため、保護者の見守りの中で放課後のお迎えを待つなどもある。

○教育問題審議会とは

教育委員会で諮問する案件があって都度設置。直近では学校再編計画の答申。

○地元児童が0になった場合

都市計画の関係で新規住民も期待できず、可能性はある。

（議長）廃止とならないようにと考えている。

再編計画の中では存続することとしている。積み上げたノウハウ、価値を重視し、守っていく必要があると考えている。

○指定校外通学

大規模校解消のための変更している地域もある。

○再編計画で義務教育学校となった中学校への進学

教育課程でのギャップも考えられるが、転校生への対応と同様に、個別のフォローを行う見込み。

○複式学級の経緯

これまで複式学級になったことはない。僻地遠隔小規模校協議会の活動で、府に対して加配を要請し、対応してきた

○大学の先生の協力が多いが・・・

講師の謝礼などは委員会が予算化している。先生向けの研修などもあり、モチベーションアップになっている。学校も活性化している。特認校制度の当初、和歌山大学の先生にT Tで入ってもらったところから継続している。

○その他

- ・地域の祭りに特認対象児も参加している

・卒業児が中学校に上がる時、やはり一部の子は戸惑いもある。段差をうまく登れない。課題である。

○芝生の管理

スプリンクラーが設置されているが、夏場は管理職が水撒きを追加。

シルバー人材Cの校務員が芝刈り（エンジン付き芝刈り機あり）をしている。

児童も掃除の時間で草抜きをしたり、石を拾ったり。

（議長）芝生の品種が重要。ティフトンという品種がよい。耐踏圧性が高い。高麗芝は根が太くなり固くなる。

※所感

泉南市立東小では、小規模特認校の特認児童数が地元児童数を大きく逆転しているということでその理由となる要因や取り組みを知ることが目的とした。

校長先生の説明は、いわゆる学校の取り組みということであったが、やはり特認校だからこその内容や、サポートを受けている様子があり、一概には比較できないものではあるが、大津町のそれより、取り組み項目も多く、充実しているのではないかと感じられた。しかし学校の魅力をどうアピールするかという方向性は同じだった。

大津東小でも、特認児童数は微増していつているが、泉南市ほどの急増とはなっていない。泉南市では複式学級はなく、大津町では依然、複式学級が存在している。

特認児童の拡大のためには、制度と取り組みをどこまで徹底するか、逆転してもよいと振り切った考えに立つか、も議論すべきかもしれない。

地元児童数が0になったらどうするか、との質問に、そうなっても制度を継続していくという回答があり、制度が単に児童数の確保だけを目的としたものではないものと捉えていると思われる。

泉南市と大津町の小規模特認校の児童数の推移

泉南市	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
全校児童	46	49	51	57	54	49	64	67	66	62	64	69				94	79			78
地元児童	46	43	39	36	30	20	20	20	21	19	18	14					79			15
特認児童	0	6	12	21	24	29	44	46	46	43	46	55					10			63
地元1年生	4	6	4	4	2	4	4	4	3	2	1	0								1

大津町	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
全校児童	60	57	55	59	57	52	55	57	50	43	47	52	47	43	44	48	45	41	37	46
地元児童															42	43	40	34	29	33
特認児童															2	5	5	7	8	13

学校での視察であったため、議会事務局・教育部の職員には学校までご足労をいただき、また、議長には最後までのご臨席を賜り、感謝申し上げます。

時間配分の関係で、学校施設の見学ができなかったことが残念。もし、何か準備をされていたことがあれば申し訳なかった。今後は、先方のスケジュール配分の意図の確認をしていくようにしたい。